

コロナに慣れる怖さ

時系列的に昨年の春からコロナの感染拡大にともない、緊急事態宣言、蔓延防止の実施、高齢者と医療従事者のワクチン、デルタ株の流行、若年層感染者増加、ワクチンの不足、そして、現在は夏休みを終え二学期に入り、学校内の感染拡大を警戒している状態です。昨年の今頃は、自粛に心掛け、なるだけ、人との接触を控えることにしていました。しかし、今は第五回の緊急事態宣言もなれてしまい、コロナに対する警戒感が薄くなり、特效薬もなく、コロナを無くさなければという強い思いがなくなっています。しかし、感染者は一年前より爆発的に増加しています、大阪府知事はコロナ野戦病院を作るように訴えました。すなわちコロナはミサイルや機関銃を使わないが、戦争であるということです。しかし、国民はほとんどそのような認識はありません。慣れてしまっているのです。私は大丈夫という慣れです。いまさら、家に閉じこもってられないという危険認識の欠如です。そこが一番怖いのです。体調管理を行い、手洗い、うがい、検温を行い、人ごみを避けるように心がけなければなりません。

コロナと教会の鐘

コロナはデルタ株を吐き出して、
長田の鐘はグーン グーン
朝と夕にグーン グーン
コロナと罪を吸い込んで
長田の町をきよくする
御父と御子は 微笑みを

長田名物

「夕焼け小焼けの日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る。おてて繫いでみな帰ろう。カラスと一緒に帰りましょう。」山のお寺の鐘でなく教会の鐘を夕方六時に二四回鳴らして屋上から降りてくると、長田商店街の責任者である友人が訪ねて来ました。鐘の音が喧しいと苦情に来たのではと心配していましたが、そうではなく「今の世で町の中で鐘を鳴らしているところはどこもない。長田の名物だ。」と喜びと感謝に上等なバナナをくださいました。世の人々はコロナ、豪雨、アフガニスタン情勢等々、毎日不安の中で過ごしています。当たり前のように朝夕教会の鐘が鳴っているのを聴くとき心が和むようです。混沌とした時代こそ当たり前のことがいかに大事であるかと思ひ知らされます。長田の人の救いと癒しのために今日も祈りつつ、心を込めて朝夕六時の鐘を鳴らさせていただいています。

いちじくの葉

最近、地下鉄長田駅西出口二番の出入り口にあるいちじくの木に沢山のいちじくが実っています。とって食べることもおいしかったです。最初の人類、アダムとエバは神様の言いつけを破って、目が開かれ自分たちが裸であることを恥ずかしくていちじくの葉を腰に覆いました。世界的大流行のコロナは、神様の創造を無視して環境を破壊している人間の罪の報酬です。初めに罪を犯した時は前を隠していましたが、今回は口をマスクで隠すようになりました。以前は人から顔を隠すためにマスクをしていましたが今は常識になりました。顔を隠す人用がない人も感染予防のためにマスクをします。私を含めてマスクをして顔を隠したい人も結構多いと思います。本来人間はそうでなく、罪とコロナに勝利してマスク無しで、神様と人の前に恥ずかしくない姿で話し合えるように個人、社会に一日も早く回復されるように願います。

オリンピック金メダルラッシュ

オリンピックで日本は金メダルラッシュが続いています。それと同時にコロナ感染者も連日記録を更新しています。金メダルでコロナは帳消しになると思っているのでしょうか。オリンピックは夏が過ぎると終わりますが、コロナは終わりがありません。2年間マスクをして暮らしました。今後も死ぬまでマスクをして生活をしなければならぬかもしれません。ひょっとしたら、人類はコロナに支配されるかもしれません。すなわち、コロナを前提として生活をしなければならないということです。しかし、環境は変わっても、いや、コロナも人間の欲で環境を破壊したしっぺ返しですが、神様の愛は変わらないどころか、益々、いや増します。罪を悔い改め、イエス様の十字架によって、罪から救われ、永遠の命をいまから持つことが出来ます。コロナも死もない天国が私たちの国籍となるのです。その天国をめざして、信仰を励みましょう。

東京オリンピック

今から六七年前に一九六四年（昭和三九年）一月一日に東京オリンピックの開会式がありました。私は当時高校三年生でした。その日は就職内定した当時光洋精工（現ジェイ・テクト）の大阪府柏原市にある国分工場に行きました。会社は稼働していて、社員食堂でオリンピックのニュースが放映されていました。そして国鉄三宮駅前に降りると日中なのに人通りが少なかったです。おそらくオリンピックの開会式をテレビで見ていたのでしょう。そして六七年後の七月二三日第二回目の東京オリンピックが開催されます。当時と比べて天国と地獄の違

いです。第一に無観客の大会。コロナ感染の増大の大会。そして大会運営者が大会の平等、平和、差別なき世界をスポーツにより実現しようとする理念から外れ、女性蔑視、障害者迫害、ユダヤ人迫害を揶揄するような人たちであるということです。今更中止するわけにはいけません。コロナ感染が増大しないように、オリンピックに続いて開催されるパラリンピックが無事開催できるように祈ります。

近代オリンピックの歴史

今から約一〇〇年前の一九二四年パリオリンピックの
一〇〇に有力な金メダルを期待されていたエリック・リデル選手は決勝のレースが日曜の為、棄権しました。「わたし重んじる者をわたしは重んじ、わたしを蔑む者は軽んじられるからだ。」(サムエル第一、二ノ三〇)の御言葉を神様に示されたからです。祖国スコットランドでは非国民と非難する人もいました。しかし、彼は人の名誉より神の名誉を優先しました。神様はこの世においても神に従うものをお見捨てにならないばかりか、見捨てられたと思われる人を通して神様は御業を行われます。日曜以外に行われた二〇〇で銅メダル。四〇〇ではスタートから一〇〇と同じスピードを最後まで維持して世界記録で金メダルを獲得しました。世界記録は四〇年後の一九六〇年のローマ大会まで破られなかった大記録でした。彼は母国スコットランドの英雄となりました。一生安定した幸せな生活もできたのですが、かれは人生の金メダルを獲得を目指しました。当時、中国は戦争、洪水、飢饉で苦しんでいた。神様は彼に召しの声をかけられ、宣教師として遣わされ、同じ信仰をもっている若い女性と結婚して三人の子どもを与えられつかの間の幸福をあげていた天津に日本軍の爆撃があり、エリックは家族をカナダに帰国させたのです。そして、自分は捕虜洲所に入れられ、同じ部屋にいた少年に金メダルを獲得したレースに履いたシューズをプレゼントし、また、捕虜交換で当然資格がありながら、妊娠直前の妊婦に釈放の権利を譲りました。「人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれももっていません。」(ヨハネ一五ノ一三)。エリックは天国の金メダルを獲得のために人生と言うレースに挑戦しました。やがて、世界で一番早いと言われたエリック・リデルは走るところか、床に起き上がることもできないようになり、妻フローレンスに「きみと子どもたちに特別な愛を」で終わる短い手紙を書き、その日深い眠りに入った。その晩九時二〇分、目を覚まして看護師に「明け渡し完了」と言った。こうして一九四五年、終戦の年、四三歳でオリンピックチャンピオンのエリック・リデルは、残り五マイルを走ってゴールインし、勝者の列に加わった。わたしたちもオリンピックにまさる人生のレースの究極のチャレンジです。オリンピックは勝つことも負けることもあります。人生のレースは敗北は許されない過酷なレースです。オリンピックゲームにルールがある如く、人生のレースにもルールがあります。そして、ルールに忠実に従いさえすれば必ず金メダルを獲得することが出来ます。その人の才能や努力よりルールにしたがうことが重要です。ルールとは神の御言葉であり、聖書の言葉です。福音の言葉です。(オリンピック伝道トラクト「大会の歴史と物語」参考)

有りのままは正直の看板

日本のことわざであります。しかし、ありのままは自分の醜いものも全部表すことなので、正直なことではなく、自他ともに災いをもたらすことです。ありのままがいかに醜く、それにより自他を不幸にし、そのために神の子イエス・キリストを十字架につけたことを深く悔い改めて、有りのままの人間からボーン・アゲイン(イエス様により新しく生まれ変わった)したものにならないければなりません。そこから出る有りのままは、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、柔和、自制という神様の品性が心の底から聖霊により湧き上がります。

好きこそ道の上手なれ

好きなことは熱心に涙ぐましいほどに挑戦します。なぜなら、本人にとっては苦にならないからです。興味のない者にとっては、意味が理解できません。なぜあれほど熱心になるのか。宗教に対して興味がないのは、それは、根本的に好きになれないからです。パワハラ的な服従や成功マニュアルの追求に他ならないからです。企業論理のやり方は目標を達成するとさらにハードルを高くするという悪循環の繰り返しは、好きになれません。いやいやするだけで、面従腹背です。好きとは本質的に存在するだけで、傍にいてだけで満足するのです。奇麗から。豊かだから、賢いから、便利だからでなく、存在の満足感です。信仰とはイエス様を大好きになることです。イエス様に裏切られたり、捨てられたり思うことがあっても大好きになることです。自分が底無しに罪深い者であり、主イエス様がとんでもないほど愛なる方であると信じれるとき、どんことでも苦にならない。空しくならない。いやになりません。「イエス様が大好きです。」と感謝できるのです。

繕りを戻す

昔は紙を繕って糸繕りを作り、製本に使用しました。繕りを戻すとは紙に戻すことです。復縁に使われます。巣ごもり社会にコロナ離婚が起きました。そこから繕りを戻すのは困難です。繕りを戻すとは聖書に和解とあります。人間の方から神様に立ち返るのでなく、神様が声をかけてくださり、神様が言いたいことは山ほどあるけど、何も言わないから帰ってきてほしいと願っておられます。社会では相手が謝るならこちら折れるということですが、神様は無条件に繕りを戻そうとさせていただきます。これは非常に困難なことです。例えるなら、福島原発が津波で破壊して汚染水が発生し、完全に無害化するのには何万年もかかる。繕りを戻すとは非常に困難です。神様と人間の関係はそれ以上に回復不可な状態です。それにもかかわらず、神様の方から繕り戻してくださいました。